

中国少数民族地域における都市化と社会変動

——新疆ウイグル自治区カシュガル市の事例を中心に

アナトラ・グリジャナティ（中国・新疆師範大学）

キーワード：少数民族地域、都市化、社会変動

はじめに

過去10年間、中国では年平均約10%の速度で都市化⁽¹⁾が進んでおり、その規模から見ても速度から見ても、人類史上空前のプロセスとなっている。建国当時（1949年）都市化レベルは低く、都市部の人口が全体に占める割合は0.6%に過ぎず、都市と農村や少数民族地域ははっきりとした分割状態にあった。1978年から2012年の間、中国の都市化レベルは17.9%から51.3%に伸び、都市部の人口が農村部の人口を上回った⁽²⁾。現在、人口100万人超の都市は118あり、世界の都市別人口（500万人以上）上位25都市中、中国は9都市がランクインしている。都市化レベルは年間1%の成長を保っており、今後30年間は勢いよく成長を続けるとみられている。

こうした急速に進む都市化は中国の経済を発展させ、中国社会に大きな変動をもたらしている。都市化がもたらす経済発展は一国の社会が経験する「複雑」な社会的変動の一面に過ぎず、より広義の技術的・経済的・生態学的変化が社会的・文化的な全構造に波及するという社会の「近代化」の問題でもある。中国の都市化問題に関しては、中国内部だけでなく外部の研究者も注目しているが、その関心領域は、地方や少

数民族地域の経済・農業・工業等の問題に偏っている。特に、都市化の当該地域に与えた経済的な利益ばかりが取り上げられており⁽³⁾、その波が地方や少数民族地域の従来の生活基盤、風俗習慣・文化伝統および教育領域などに与えている影響についてはほとんど言及されておらず、フィールド調査を通じた事例研究は見出せなかった。

本稿では、古くからシルクロードの要衝として知られ、1984年「国家乙級開放城市」、その後「国家歴史文化名城」、2010年「経済特区」に指定され、生活・生産の基盤、特に社会経済発展の基礎となる電力・水・交通・通信などの発展と都市化が進んでいるカシュガル市に焦点を当てる。そして、都市化の急速な進展がカシュガルの経済発展や地域文化（言語）あるいはまちづくり等にどのような影響を及ぼしているか。また、都市化が進むことによって生じている社会的言語環境の変化は民族教育にどのような影響を及ぼしているのかを現地調査で得た資料や知見をベースに考察を行う。

I. 中国における都市化とその進展による社会変化

中国建国当初、中国の都市化レベルは低く、都市部の人口が全体に占める割合は0.6%にすぎず、都市と農村とははっきりとした分割状態にあった。改革開放以来、中国においては、内陸地域（少数民族地域を含め）を中心とする農村から沿海都市部への大規模な人口移動が起き

(1) 本稿では、経済、政治、文化、交通の発達、生活の快適化が進むことなども都市化の範囲に含める。

(2) 牛文元『2012中国新型城市化報告』北京科学出版社、2012年。

(3) 張兵「日本の経験から見た中国の大都市問題の現状と課題」『立命館国際地域研究』第26号、2008年、97～112ページ。

ている。統計によれば、中国における流動人口の規模は、1982年3,000万人、1995年8,000万人、1999年1億人超、2005年1億5,000万人近くと極めて膨大なものであり、年々増大の一途をたどっている。その結果、中国の都市化率は1978年の17.9%から2006年の43.9%へ急激に上昇した⁽⁴⁾。

都市化の進行によって生じている問題は、これまでにしばしば指摘されてきた地域間の経済格差や環境問題だけにとどまらず、国を支える教育の分野においても生じている。都市化によって中国の教育普及レベルは、中等所得国の平均レベルに達している。例えば、中国建国当初、全人口の80%以上は非識字者であり、学齢児童の入学率は20%前後にすぎなかった。都市化の進展によって、2008年の高等教育の進学率は23.3%に、高校の進学率は74%、中学の進学率は98.5%、小学校の入学率は99.5%に達した。非識字率は6.67%にまで下がっている⁽⁵⁾。一方、大学進学者に占める農村出身者の比率がますます少なくなり、1980年の30%から、2008年は18%にまで減少している。急速な経済成長は多くの若者に高等教育を受ける機会を与え、2008年は550万人が大学を卒業した。しかし、32年前、中国で大学入試が再開されたばかりの頃の農民の大学進学率が30%以上であったにもかかわらず、昨年卒業した農村出身の学生は100万人にも満たなかった⁽⁶⁾。

その他、中国で都市部に出稼ぎに出てきた労働者（少数民族を含む）の子どもたちの就学も問題になっている。現在、中国には出稼ぎ労働者が2億人以上おり、都市部において最も「汚

い、きつい、危険」と言われる3Kの仕事に従事し、都市の繁栄と経済発展を支えている。その子どもの数は2千万人近い。未就学率は9.3%を超え、就学年齢に達した100万人近い子どもが入学出来ずにいる。そして、出稼ぎ労働者の子どもの入学には高額な授業料と賛助費を支払う必要があるため、収入の少ない出稼ぎ労働者にとっては大きな負担となっている。教育費と賛助費を支払えない子どもたちは、仕方なく外からの出稼ぎ労働者の子どものための私設学校に入ることが多い。また、憧れの進学・就職先である都市部、特に沿海地域の大都市へ移動してくる「大学受験移民」⁽⁷⁾の増加も、出稼ぎ労働者の子どもの就学や進学問題をさらに顕在化させているように思われる。

近年、中国の一部の省市自治区では、「農業戸籍」と「非農業戸籍」の区別を撤廃し、都市と農村の戸籍登録制度の一元化が試みられている⁽⁸⁾。こうした新たな戸籍制度の導入によって、同じ地域内での労働者の移動による子どもの教育問題は解決できると考えられる。しかし、地域を超えた移動の場合は、その問題がまだ依然として残されている。教育問題は様々な領域に波及する。中国にいる100万人以上の出稼ぎ労働者の子どもが学校の外に排除され続け、都市の街頭をうろついている状況が続けば、子どもたちの前途だけではなく、中国社会全体の安定にまで支障を及ぼすだろう。

内陸地域（少数民族地域を含む）から沿海都市部への大規模な人口移動による都市化が進む一方、内陸地域における小都市の都市化も急速

(4) 同上、98 ページ。

(5) 人民網、2009年9月29日

(6) その理由として以下の3点が挙げられている。一つ目は、都市と農村の収入格差の拡大である。二つ目は、教師と教育資源の分配が均等でないことである。同時に、大学卒業後の将来の就職の見通しが暗いことも、農村出身の学生の一部の親たちがこの方面にお金をかけたくない、あるいはかけられない理由の一つになっている。三つ目は、中国の教育改革では往々にして大都市の学校が優遇されることが多いため、将来の子供の教育と給与待遇を考慮し、田舎から都市へ移ってしまう人々が増加していることである。

(7) 中国の大学では、基本的に受験生の入試点数に基づいて合否を決めるが、地域の偏りを防ぐために、大学所在地以外の地区に対し、定員割当制度も導入している。その結果、同一の大学で各省における合格ラインがそれぞれ違うため、同じ点数を取れたとしても居住地によっては希望校に進学できないことも多い。それを避けるために、予め合格ラインの低い省に引っ越し受験しようとする人のことを指す。

(8) パートル「中国の都市化と社会の根底にある戸籍問題について」2010年、4ページ (http://mitsui.mgssi.com/issues/report/r1007c_baatar.pdf)

に進んでいる。これは、人類社会の発展過程において、避けて通れない重要な段階であり、世界各地の多民族国家と各民族にとって、現代化に向けた必然的な道りである。統計データによると、少数民族の流動人口は年間約1千万人に達し、そのほとんどが、都市部に出て就労、あるいは商売を営んでいる。都市部に入る少数民族の流動人口は、今後ますます増加すると予想されている。内陸地域における小都市問題は、上述した巨大都市の都市化問題と共通点もあれば、差異点もある。その共通の問題としては、人口密度が上がることによって生じる住宅やインフラ整備の不足、失業や就職難などの問題が挙げられる。差異点としては、都市化による地方あるいは少数民族地域の地域ないしは民族文化の変容や民族教育における変化などの問題が挙げられる。

II. 少数民族地域における都市化とその影響

2008年に1949年から2006年まで各省、自治区、直轄市、各都市の都市化率についての全国的な統計と分析が行われ、初めて都市化率の順位が発表された（「中国都市化率現状調査報告」2008年12月6日）。報告書によると、2006年の中国における都市化率の上位10都市は、上海市、北京市、天津市、広東省、遼寧省、黒龍江省、吉林省、江蘇省、新疆ウイグル自治区、内モンゴル自治区となっている。

9位にランキングされている新疆ウイグル社会における都市化の推進やその進行によって交通網が整備され長い間、閉鎖性と独自の生活圏をもっていた南新疆でも中国の沿海地域との交流や貿易が盛んに行われるようになった。こうした交流や貿易関係によって人々の移動が激しくなり、少数民族地域に定住する漢族住民が増加してきた。都市部における人口増加は都市化を進展させる一つの要因にすぎないが、特有の文化や生活様式を有する少数民族地域における異文化の移住者の増加は、当該地域のあらゆる領域に影響を及ぼすことは言うまでもない。以下では、カシュガルを事例に都市化が当該地域の経済、社会文化および民族教育にどのような

影響をもたらしているかを見ていきたい。その際、カシュガルの地域経済を支えてきたバザールを事例に、都市化が地域経済へ与えた影響を見ていく。また、カシュガルの「衣・食・住」文化を事例にしつつ、都市化の社会文化へ与えた影響も論じる。さらに、民族教育の現状を分析し、都市化の教育領域へ与えた影響も検討する。

1) 地域経済におけるバザールの存在とその変化

カシュガルは、タクラマカン砂漠西端に位置するオアシス都市で、中華人民共和国最西端の都市である。総面積は、111,794.03km²、339万人余りの人口を抱えており、そのうち約9割がウイグル族、1割未満が漢族である。カシュガルは古くから交通の要衝であり、中央アジアやインド、中国内陸から延びる交通路が交わり、隣国国境に近いという地理的な特徴を活かし、パキスタンやキルギスタンとの経済往来が頻繁に行われてきた。1999年12月から南疆鉄道のコルラーカシュガル間が開通し、中国の各地域からの鉄道アクセスの基盤が整ってきた。これは、カシュガルと外部との経済的、文化的交流に新たな発展をもたらし、また、新疆南部鉄道をカシュガルから中央アジアのウズベキスタンまで延長させることが計画されている。

カシュガルの地理的な特徴は経済にも直接影響を与えている。オアシス灌漑農業が主な生業形態であるカシュガルでは、行政機関や個人営業以外に工場などの働き口はほとんどなく、自給自足経済を可能にしたのはバザールの存在であった。バザールは、オアシスの経済を支え、ウイグル族コミュニティにおけるネットワークの広がりを発達させ、ウイグル族社会の経済的自律性を保持する重要な役割を果たしてきた。カシュガルでは現在でも農村人口が多数を占めており、農産物としては小麦、米などの穀物をはじめ、メロン、スイカ、イチジク、ザクロ、アンズ、葡萄などの果実が豊富に生産され、これらは換金農業商品としてバザールで取り引きされている。真田が指摘するように、カシュガルの農村・都市のバザールが地域の農業生産の基盤の上に商品経済を発達させ、その商品経済

によって新疆のウイグル・オアシス社会が成り立っている。換金農業商品の流通はバザール交易によって農村の余剰労働力を吸収し、またオアシス住民の経済的エネルギーをバザール交易に結集、活性化させてきた。そのエネルギーは人々を都市に向わせ、さらに都市を越えた遠隔地・国際交易へと活動の場を広げていく積極的な意志を生み出した。そこではイスラム的経済システムが運用され、歴史的に商品経済のより進んだ中央イスラム世界につながっていった。しかし、現在このような伝統的・歴史的オアシス社会の経済活動は、明らかに中国政府の影響のもとにあると論じている⁽⁹⁾。

また、新疆のバザールは、手工業や副業の発展においても無視できない存在である。バザールは、ウイグル族の伝統的な手工芸や特産品を生産し売買するところであり、伝統文化の維持・伝承といった文化伝達の間でもある。ここでは金物、道具、ドッパと呼ばれる帽子、サンドックという箱などをつくる伝統的な手工業や商売を営む職人たちが集まる職人街もある。カシュガル市のチュマン湖畔 (tuman deryasi) の周辺には「中西亜国際貿易市場」という南新疆では最大規模の総合型バザールがあり、4千余りの店舗や食品街が立ち並んでいる。以前、ここは現地の人々が自由に物々交換をする場であったが、改革開放後、一部工芸品も取り入れた商品売買の場となった。辺境貿易経済の成長に伴い、1995年に現在の「中西亜国際貿易市場」へと改造された。その後、近年の都市化プロセスが「中西亜国際貿易市場」に新たな発展のチャンスをもたらした。市政府から6000万元余りの資金が投入され、民族伝統をベースにした国際的なバザールとして改築され、国内外の観光客の人気を集めている。市場開発サービス会社の話によると「中西亜国際貿易市場」の管理費だけで年間収益が400万元余りに達しているという。

この国際貿易市場には、ウイグルの伝統的な

手工芸品やエスニックな品物が揃っており、カシュガルないし新疆の観光事業における1つの目玉として位置づけることができる。この市場には、現地の人々も買い物に来るが、彼らは日常用品しか購入しないため、関係者は観光客の多いシーズンの経済的利益を期待しており、観光開発の影響を評価している。

このバザールと対照的な存在として漢族経営者が多い「環疆貿易城」もある。カシュガル地区の民族構成から見れば、この数年間、定住している漢族の割合はあまり変わっていないが、中部や東部からの流動人口が増えている。その流動人口の一部は、農業に従事しており、春に来て秋に帰るが、商売関係で往来している漢族もいる。商業に従事する漢族は、前述した「中西亜国際貿易市場」に多少見られるものの、その多くは、「環疆街」と「歩行街」と言った二つの町に集中しており、町の雰囲気も「漢化」されている。ここには建物に民族的な特徴が反映されていない大型ショッピングセンター「環疆貿易城」があり、その店長は漢族である。しかし、雇っている従業員の中では、漢語のできるウイグル族の割合が相対的に多い。その理由は、商売や出稼ぎでカシュガルに来ている漢族はウイグル語ができないからだ。消費者の8割以上がウイグル族であるが、市場で漢語のできない客にも対応する必要があるからだ⁽¹⁰⁾。カシュガルでの漢族商人および観光客の増加は、農業以外の働き口が少ないウイグル族の人々に就労チャンスを与えているとも言えるが、そのチャンスを生かすにはウイグル語に加え漢語を使用できることが必要になる。

上述のように、カシュガルのインフラ整備の発展によって外部との交流が活発化し、地元の特産品が中国各地に届くようになり、地域経済を拡大している。また、シルクロードの要衝として以前から知られ、国内外の観光客に大人気であったカシュガルは、インフラ整備の更なる発展によって、その観光地域としての価値が高

(9) 真田安「バザール・混沌の奥にある社会システムを求めて」『日中文化研究 15 アジア遊学 1』勉誠出版、1990年、70ページ

(10) 筆者のインタビュー調査による。

まり、観光客は年々増加し、観光事業の収入も増加している。こうした都市化に伴う地域経済の成長と同時に、近年までウイグルの工芸伝統を維持し、カシュガルの地域経済を支えてきたバザールの役割にも変化が見られるようになった。すなわち、バザールでは換金性の高い商品を扱う傾向が高まり、従来からの伝統的な工芸品を作る、売るという主に地元民の生活要求に応える機能が薄くなりつつある。逆に、観光客向けの土産物を生産・販売するというビジネス的な機能が強まっている。その結果、市場経済の影響がそれほど及んでおらず、都市化の波が未だに届いていない、観光客もあまり足を運ぶことのない地域（地方）とカシュガルの経済格差がますます大きくなりつつある。

2) 都市化と地域文化

都市化の進展や外部からの観光客の増加とそれに伴う観光開発の進行によって、カシュガル市内には、大きな変化がおとずれている。その変化は、地域文化としての特徴を有する「衣・食・住」などの側面にうかがうことができる。

(1) 衣飾（ファッション）

ファッションの側面からその変化を見てみると、そもそも、イスラム教義は女性に厳しく、皮膚を家族以外の異性に見せないような服装を身につけることが強く求められている⁽¹¹⁾。カシュガルでは現在でも、女性は30代から、特に既婚女性は袖のない、襟の低い、丈の短い服、あるいはジーンズを身につけると世間から非難される傾向が強い。ただ、従来のカシュガル社会に比べるとある程度の現代的なファッションが認められるようになってきている。未婚の女性に関してはミニスカートでなければ、丈の短いものでも許されるようになり、スカーフの着用も強制されなくなっている⁽¹²⁾。そして、髪型に関しては、伝統的な三つ編みから個人の好みの髪型ができるようになってきている。ファッション

に関するこうした変化は日常的なものを超え、結婚儀式で着られる服装にも見られる。一方、スカーフの着用や服装などでイスラムの国々のファッションを真似し、イスラム文化圏で流行っている派手なデザインに憧れている若者もあり、ファッションに関して多様な価値観が見られるようになってきている。

(2) 食文化

カシュガルはウイグル族のエスニックかつ伝統的な食文化の発祥地とも言われ、ウイグル族特有の食文化を維持し伝承してきた地域である。食文化に関しては、一見あまり変化がないように見えるが、パスタ、ピザ、ステーキ、サラダなどウイグル族の食文化にない洋食も取り入れつつある。ただ、これらはほとんど地元で取れた食材を使用し「新疆風」のパスタやピザとして作られている。つまり「Halal（ハラール）」の食品として定着している。一方、「百富汉堡（Best Food Berger）」やウイグル的な「Chayhana」ではなく近代風の喫茶店（一陽珈琲）なども進出している。いずれもウイグル風のレストランやファースト・フード店より価格が高く、厳密に言うとはハラールでもないが、若者には非常に人気がある。このように、食に関してこだわりの強いカシュガルでも都市化の進展によって、豚肉は使っていないがハラールとは言えない食文化も登場し広まりつつある。

(3) 建築文化

カシュガルの建築文化は観光客を集める1つの目玉でもあり、政府側ができるだけ民族的な特徴を維持していくよう力を入れている。近年、観光価値があると判断された一部の建物を除いて、多くの古い建物が取り壊されつつある。例えば、「喀什市老城区改造事業」はその一例である。カシュガル市旧市街地再開発事業は、2001年9月からスタートし、現在まだ進行中である。カシュガル地区の共産党書記長は、2008年8月12日にカシュガル市で開催され

(11) イスラム的な規範は国や地域によって異なっており、服装、礼拝、断食、飲酒などに関する規定も、厳しい国や地域と相対的に緩い地域がある。新疆においても、カシュガルは他の地域より相対的に厳しく、現在でも年寄りの女性が顔をレースで隠している。

(12) スカーフの着用に関しては、職場では着用しないが、その他の私的な場所では着用している女性も少なくはない。

た「喀什市老城区改造総合治理項目報告会」において、事業方針を次のように強調している。すなわち、老城区の改造は人の安全を前提に、民族的な特徴を有する建築を保護する。民衆の身の安全に危険をおよぼす、土で建てられた古民家を保護するのではなく、それを改造し、人民の生活レベルをさらに高める必要があるという。

次に、このような改造事業がカシュガルの地域文化、あるいは現地の人々の日常的な暮らしにどのような影響を与えているのかを見ていきたい。

老城区はカシュガル市のヤワク管轄区に位置しており、面積は市面積の2割を占めている。人口は市内総人口44万人余りの5割を占めており、改造区の住民は65,192戸、221,053人、そのほとんどがウイグル族である。中心区の人口密度は2.6万人／平方キロメートル、建築密度は70%以上となっている。ここは、西域36国の1つである疏勒国の首都であり、カラハン王朝の遺跡もある。10世紀、カラハン王朝がここに宮殿を建て、まちを創り上げて以来、皇室遺族の末裔たちが生活し、人口の増加とともに遺跡上に迷宮のような通りや路地を造ってきた。現在残っている土木建築物は数百年の歴史を有しており、国家歴史文化名城、また、世界最大の「生土建築群」とも言われている。したがって、老城区の改造は中国内外の注目を集めており、反対の声も上がっている。

専門家の間では、なるべく現在の姿を残し、民族的な特徴を維持しようという見解も出され

ている⁽¹³⁾。しかし、政府側は、このような意見は現実的ではないと言い、住民の安全のための改造が必要であると主張している。老城区は7つの社区に分かれており、それぞれが家の玄関口のスペースなどを活用し、大工や鉄工を営んだり、あるいは、バザールで取り引きする金物、各種の道具、織物、刺繍、民族楽器、ドッパ（帽子）、サンドック（箱）などをつくる伝統的な手工業や香辛料の商売を営んでいる。その他、観光客にウイグルの風俗、建築文化、食文化、日常生活の様子などを紹介し、報酬を受け取る一部の裕福な家庭もある⁽¹⁴⁾。また、「低保戸」⁽¹⁵⁾の家庭も多く占めており、家庭背景や経済状況がそれぞれ異なっている人々が居住している。

住民の話聞いてみると、ほとんどの人が老城区の改造のため引越しすることに同意はしていない。7つの社区のうち最大の社区であるケレムバッグ（Kerembag）の主任M氏の話によると、Kerembag社区は2,295世帯（そのうち1,460定住世帯）、総人口は7,441人であり、その8割の人が引越しに反対しているという。M氏は「家屋の6割以上が危険にさらされているため、住民を安全な場所へ引越しさせる必要がある。しかし、住民の間では、政府に対して非常に合理的な意見も含め、様々な要求⁽¹⁶⁾が出て」と語っている。確かに、ここから引越すると日常生活に困るという家庭も多数あった。例えば、C氏（20代前半の男性で母親との2人暮らし）は、16歳から3年間かけて（民族）楽器作りを習い、現在は親子で食べていけるほ

(13) 老城区の改造計画のため天津から招かれている建築関係の専門家の見解であり、筆者のインタビューで得られたデータである。

(14) このような家庭は、家の外と内をすべて彫刻で飾っているため、ひと部屋のリフォーム（飾り付け）に4万元以上（60万円以上）という相当な金額を使っており、引越しを拒否している。あるいは、その金額の支払いを政府側に求めているという。

(15) 「低保戸」とは、子どもがいない高齢者、身体障害者、安定した収入はないが学校に通っている子どもがいる家庭、リストラされた者などを対象に政府から月々一定の生活費が支払われている家庭を指す。その生活費は、この制度が実施された1996年は、月々27元（400円程度）だったが、2000年から117元（1800円程度）に上がり、調査を実施した2008年は178元（2700円程度）が支給されていた。

(16) 住民の意見は、以下の6点にまとめている。①手工業、特に大工や鉄工に従事している家庭の場合は、どうしても戸建ての家が必要となるため、集合住宅への引越しを拒否している。②祖先が残してくれた土地なので、ここから離れたくない。政府の規定にそって、建て直すから引越しさせないで欲しい。③学校に近い市内に引越しすることには同意するが、郊外には行かない。④マンションではなく、現在の土地の1平方メートルを5000円で換金して欲しい。⑤家のリフォームにかなりの金がかかったため、それを支払ってくれないと、引越ししない。⑥マンションの高熱費などの支払いができない。もし、免除できるなら引越す。

どの収入を得る店を持っている。今は、1人の弟子と実用楽器やお土産用の玩具楽器などを作っている。彼は、「老城区は2004年から旅行会社に50年間の期限で買収されているので、夏は観光客が大勢来る。観光シーズンに自作の楽器が売れるから、収入になっていたが、もしここから引越したら新しい店を探して、安定するまでは生活が苦しくなる」と引越したくない理由を語っていた。カシュガル市の城市建設局のある責任者によると、市の都市化建設を進めていく中、新築建物は民族的な特色で建てること、古くて改造が必要な建物に関しては、本来のデザインをもとにリフォームすることが強調されている。しかし、民族的な建築はコストが高いため、その実現は厳しく、エティカル周辺の建築を伝統的な風景を保ちながら改造していく方針であるという。

このように、都市化の進展はカシュガルの地域経済や地域文化などに新たな変化や発展をもたらしている。こうした変化はカシュガルの人々に多様な選択肢を当て、伝統的な生活様式と違った文化様式のあり方を示した。そして、都市化の波は教育領域まで及んでおり、教育施設、教育内容、教育言語などに大きな変化が訪れている。次章では、都市化の進展が教育とりわけ民族教育にどのような影響を及ぼしているかを見ていく。

Ⅲ. 都市化と民族教育

中国の少数民族地域における都市化が進むなか、人の移動が大規模でますます激しくなり、少数民族地域に定住する漢族住民が増加している。王柯が指摘するように、少数民族地域における漢族定住者の増加は中国の経済一体化をさらに進行させ、全国統一市場を形成している⁽¹⁷⁾。その結果、少数民族言語のみでは人々の多様な需要に応えることができなくなり、統一のコミュニケーション手段としての言語は漢語になりつつある。進学や就職の際、漢語の必要性がま

すます高まり、少数民族社会のあらゆる領域において漢語が浸透しつつある。人々の間では、民族教育を受けても進学や就職が保障されないという考え方が広まり、自ら漢族学校へ入学する人々が増えている。かつて、総人口の9割以上がウイグル族であった南新疆でも民族構成の変化による社会的言語環境の変化が見られ、それが教育の在り方にも影響を及ぼした。

一方、都市化の進展により、かつて財政などの面で優遇されていた民族教育への投資はむしろ減少している側面も指摘されている。地方への分権により国の財政が困難となったため、中央政府の少数民族教育への特別支出金は7100万元から2000万元へと大幅に減少している⁽¹⁸⁾。このような財政難の問題と、経済的な利益を追求し自ら漢族学校を選ぶ人々（少数民族）の増加は民族教育に大きな変化をもたらしている。その変化の様相は民族地域の歴史的文化的背景によって大きく異なっており、都市化の結果がもたらした一律の変化と捉えきれない部分もあることを断っておきたい。

1) 都市化に伴う教育観の変化

かつてオアシス灌漑農業が主な生業形態であって、行政機関や個人営業以外に工場などの働き口はほとんどなかったカシュガルでは、これまで学校教育に対する態度は一般にネガティブであり、義務教育が終わった後、ウイグル族社会で通用するような伝統技術を身につけさせるという考え方が強かった。日常生活で漢語の使用を必要としないため漢語教育に対しても、あまり熱心ではなかった。ところが、中国で資本主義的市場経済への移行が始って以来、各地域において商品経済下の自由競争メカニズムが取り入れられた。こうした経済政策のもとでは、学校教育は市場経済発展のための重要な手段として位置づけられ、人的資本の育成が求められるようになった。それと同時に、少数民族に対して求められる漢語能力の基準はますます高まってきた。

(17) 王柯『多民族国家中国』岩波新書、2005年、169ページ。

(18) 民族教育の経費問題に関しては、「中国朝鮮族教育を巡る問題点3」を参照。(http://blog.goo.ne.jp/kisyuhankukhainan)

このような経済開発および経済政策に伴う人々の教育観、人材観、競争観の変化は、言うまでもなく少数民族教育にも影響を与え、社会のニーズに応える教育を求める個人が増加してきた。日常的に漢語の使用が非常に少ないカシュガルにおいても、人々の間では子どもの進学先や就職先などを考えて漢語教育を希望する者が増えている。カシュガルでは、漢族人口が少ないということもあり、漢族学校が少なく、そこへの入学を希望する少数民族児童の誰もが入学できるわけではない。特に、近年は漢族学校への入学希望者が増加し、学校が受け入れきれない状況になっている。そこで、漢語が母語ではない子どもを対象に入学試験（算数、国語「漢語」のテスト）を実施し、試験に合格した子どもだけに入学を認めるようにしている。テレビなどマスメディアを除けば、日常的に漢語との接触がほとんどない言語環境で育ったウイグルの子どもたちは、生活の中で自然に漢語を身につけることは非常に難しい。その結果、従来は一部の高学歴の人々だけを対象としていた漢語を中心とする早期双語教育を希望する人々が、現在かなり増えている。

こうした人々の要求に応えるため自治区政府は予算を確保し、カシュガルの各地域で幼稚園を設立した。これは、上述した「中央政府の少数民族教育への特別支出金が大幅に減少している」ということに矛盾しているように見えるが、カシュガルを含めて新疆では、新しく設立された幼稚園は漢語普及のための「双語幼稚園」であり⁽¹⁹⁾、民族教育のためとは言い切れない部分がある。自治区政府は「双語幼稚園」の設立や「幼児双語教育」の実施およびその予算配分に関する方案（2006年 - 2010年自治区扶持七地州開展農村学前“双語”教育工作和經費使用方案）を立て、幼稚園さえ存在しなかった辺鄙な農村地域まで幼児双語教育を普及させ

た。その方案で「2006～2010年までの5年間で、7つの地域や州の56の県（市）において、農村戸籍の園児の85%以上が2年間の幼児双語教育を受けられるようにする計画を立てている。それにかかる経費として、2006年9月、自治区は51,900名分の園児の給食費（3食）と教材費、1296名の双語教員の給料など幼児双語教育経費として2244万元（約3億6千万円）を支給した。また、当年年度末には予定数を超えた入園応募者分に対して、さらに、900万元（約1億5千万円）を追加した。この方案は早期双語教育を希望する彼らのニーズと合致したため、人々の幼児教育への積極性をさらに引き出し、幼児双語教育の普及を促進させている。

2) 都市化による民族教育の変動

都市化による人々の教育観の変化や自治区政府による一連の教育改革などは教育施設、教育内容及び教育言語に大きな変化をもたらしている。その結果、民族教育の少数民族各自の歴史、文化、伝統、生活習慣などを維持し、それを次世代に伝えていくという民族文化を継承する役割がますます衰退し、逆に国民統合の実現を促す役割が強調され、漢語教育あるいは双語教育の実施が普及・拡大されたのである。そして、双語教育における教授用言語については、従来の一部の科目を漢語で行なうという教育モデル⁽²⁰⁾から「語文」（母語）以外のすべての科目を漢語で行なうという教育モデルへ移行しつつある。

そして、2011年に、新疆ウイグル自治区政府が「十二五」教育發展計画を制定し、「新疆ウイグル自治区少数民族学前及び小中学校“双語”教育發展計画（2010-2020年）」を着実に実施することを求めた。同時に、次のような詳細な目標も定めた。すなわち、（1）2015年までに、少数民族系小中学校において双語教育を基本的に普及させ、双語教育を受ける少数民族の

(19) 例えば、カシュガルの疎勒県では、2006年5月から2007年8月まで双語幼稚園が81カ所設立され、漢語を中心とする双語教育が行なわれている。

(20) 現在は、新疆で二種類の双語教育モデルが存在している。一つは、小学校では算数、社会、理科などの科目を漢語で行い、他の科目は少数民族言語で行う。中学校と高校では、算数、社会、物理、科学、理科、生物学、歴史、政治（道徳教育を含む）などの科目を漢語で行い、他の科目を少数民族言語で行なうモデルである。もう一つは、小学校から高校まですべての科目を漢語で行い、母語を一つの科目として設ける教育モデルである。

表(1) 言語別の学校数(単位:個)

	学校 総数	漢族 学校	ウイグル 族学校	カザフ族 学 校	モンゴ ル 族学校	シボ族 学 校	キルギス族 学 校	ロシア族 学 校	民漢 合校
小学校	4,589	921	2,887	228	18	2	71	0	462
中学校	1,376	438	545	124	9	2	6	0	252
高 校	454	212	136	25	2	1	1	0	77
総 数	6,419	1,571	3,568	377	29	5	78	0	792

新疆维吾尔自治区教育厅編、『新疆维吾尔自治区教育統計資料』、2007年より作成

児童生徒数を全生徒数の75%までに増やす。とりわけ、義務教育段階の双語教育生徒数を全体の80%までに増やすこと。(2) 2020年までに、双語教育を受ける児童生徒数を全生徒数の90%までに増やし、義務教育段階の双語教育生徒数を95%までに増やすことが目標である。

教育内容に関しては、「Uyghur Edebiyati (ウイグル語文)」を除き、その他の教科は漢族学校と同じものとする。自民族の文化習慣や歴史などに関する内容は、「Uyghur Edebiyati」の中へ取り入れられているため、決して充分とはいえない内容となっているのが現状である。

また、教育内容の調整と同じく、自民族の文化にそった教育のためには重要な教育施設である民族学校も、民族学校と漢族学校を統合する「民漢合校」の増加によって急減している。民族学校が急減している新疆ウイグル自治区の言語別の学校数をまとめた表(1)を見ると、ウイグル族の民族学校が多く、「民漢合校」は全体として少ないように見える。それは、南新疆などそもそも漢族人口が少なく、漢族学校も少ない(地域によって漢族学校が存在しない場合もある)地域では、「民漢合校」の可能性が低い。数値的には民族学校が多いように見えるからである。例えば、新疆ウイグル自治区の区都ウルムチ市では、すべての学校が「民漢合校」になっており、どの民族の民族学校も存在しない。一方、南新疆のカシュガルやホータン等の周辺地域では、漢族学校が城鎮にしか設置されていないため、田舎の民族学校は合校でき

ない。全体として、「民漢合校」は文化大革命後44校まで減ったものの、2007年には小・中・高を合わせて791校にまで増えている。

そして、教材に関しても、これまでは「Uyghur Edebiyati」以外の教科書は漢族学校で使用されているものをウイグル語に訳して使ってきた。ところが、2010年9月からほとんどの小中学校では漢族学校と同じ教科書が配られ、使われている。教育言語に関しては、小学校段階から「Uyghur Edebiyati」を除いて、その他の教科はすべていわゆる「双語」で行われるようになってきている⁽²¹⁾。

新疆の民族教育におけるこのような改革は、ウイグルの児童・生徒の教育レベルを向上させ、就職の選択肢を増やし、彼・彼女たちの将来の生活状況を改善するためであるとの前提で進行している。このようにウイグル社会では、進行する都市化に適応できる教育としてウイグル特有の「民族教育」が形成されつつある。

おわりに

本稿では、新疆ウイグルを事例に、中国の少数民族地域における都市化が当該民族地域にどのような影響を与えているかを地域経済、地域文化、民族教育という三つの側面を中心に見てきた。都市化の進展は確かに新疆のインフラ整備を発展させ、地域経済を成長させている。しかし、カシュガルの地域経済を支えてきたバザールの地元民の生活要求に応える機能が薄くな

(21) 筆者が2012年11月、新疆教育厅の依頼で行った「小中学校双語教材使用実態」に関する調査で得たデータによる。

り、観光客のニーズに合わせるビジネス的な機能が強まっている。地域文化としての特徴を有する「衣・食・住」文化には、まだ地域的民族の特徴が根強く残っているが、民族教育に訪れた変化はより大きい。

都市化の影響を受けている民族教育は、その他の民族地域と共通の問題と、その地域特有の問題を抱えていると考える。進行する都市化に適応できる教育を求め、漢語教育あるいは漢族学校を選ぶ人が、どの民族の間でも増加している傾向はあるだろう。行政レベルでは、こうした傾向に関して十分な対策が行われており、どの地域でも漢族学校への入学が認められ、奨励されている。しかし、民族言語・文化の維持や発展と国民統合の実現を促す役割を果たす民族教育における教育言語の変化は、それぞれの民族集団の歴史的文化的背景の違いによって生じたものであったとしても、都市化がもたらせた結果に違いないだろう。

このように、少数民族地域における都市化と民族教育をめぐる問題は、非常に複雑であり、その民族がおかれている社会的状況や歴史的背景などによって異なっている。外部（外国人および現地から一旦離れた研究者を含む）の人々からは、少数民族地域における都市化は、一種の漢族化プロセスであり、それによって、少数民族の言語や伝統文化が危機にさらされているように見える。民族教育における変化は、まさに一種の「漢族化」プロセスであろうが、「少数民族の伝統や風俗習慣の保護およびその保護が重視されるだけでは、貧困を乗り越え現地の経済を発展させることはできない」という見解もあったように、現地の人々はそれを貧困から乗り越え、物質的豊かさを手に入れる一つの手段として認識しているに過ぎない側面も指摘しておく必要がある。

今後、都市化の更なる推進によって、少数民族の人々の価値観はさらに多様化していくに違いない。その中で、憧れの近代的な生活を求め、言語あるいは学校を選択する人々も増えるだろう。一方、都市化の影響を受けながらも自らの生活様式や風俗習慣を守り、それを時代に合わせつつ維持して行こうとする人々もいるだろ

う。このように、ますます多様化していく人々の要求を満たすことができるのは、教育とりわけ民族教育の存在であり、その法制化プロセスを急ぐ必要があるように思われる。また、民族教育の維持や更なる発展によってこそ、中国社会の文化的な多様性を保護できる持続可能な都市化を進めることができると考える。

〔付記〕本稿は、「ウイグル族伝統手工芸文化の伝承とその社会的機能に関する研究」（14BSH092）、2014年度国家社会科学基金一般項目；「双語教育中少数民族文化傳承研究」（040413B02）、自治区普通高校人文社科重点研究基地「新疆少数民族双語教育中心」の研究助成による研究成果の一部である。（代表者：アナトラ・グリジャナティ）